

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
昭和五十一年三月二十五日 發行(毎月一回・十五日發行)

(通三二一號)

# 慈

# 光

第二十八卷

第三号

## 次

唯 仏 与 仏 の 智 見 …………… 近 角 常 観 …… (1)

人 生 問 題 と 信 仰 …………… 福 島 政 雄 …… (5)

福 島 先 生 に お 別 れ し て …………… 花 田 正 夫 …… (14)

## 目

一 道 会 の 記 (二) …………… 柳 原 徳 草 …… (18)

念 仏 詩 抄 …………… 木 村 無 相 …… (22)

# 唯佛与佛の智見

近角常觀

唯仏興ふ仏の智見とは、ただ仏と佛とのみ知らしめすとことであるということでありませう。大經の東方偈の文に

「如来の智慧海は深広にして涯底なし。

二乗のはかる所にあらず。

ただ佛のみ独り明かにさとりたまえり」

とあるように、如来の広大無辺なる智慧の境界は、深く広くしてきわまりのないもので、われわれ人間のはかり知ることの出来ないものであります、ただ仏と仏とのみが可能く知らしめす処であるというのであります。

昨今、私の心の中は、母が病気で今にも知れぬという有様で心配しているものでありますから、誠に余裕のない次第で、何となく心許ない気分でお話申しているが、しかし一面においてかかる場合に、私の頂かしてもらっている心の有様を皆様に聞いていただき、如来の広大な思しめしを味わわしてもらふことは、かえってそれがよかろうと思つて今日もしばらくお話する次第であります。

先週の土曜日に大学病院へ母をつれてまいりました処が

非常に脈が悪かったので、お医者様も大層驚かれて、すぐさま連れて帰れとのこと、皆のものも大いにあわてて寝台で連れ帰ったのでありますが、その時に母の感じたことは「大勢がこのように騒ぐのは、いよいよ自分も今が最後であろう。平素から聞かせてもらっているが、この期におよんでは何を考えたところが最早いかんともしかたがない。こういうようにあてになぬ、しょうのないものを憐み給う如来の広大のお慈悲であるから、それを有難くよろこばせていただいた」と、その翌日も、また一昨日も私に話されたことでもあります。

さきに引用した、東方偈の文に

「一切の法はなおし夢と幻と響との如しと覺了し

諸の妙願を満足して、必ず是の如きの刹を成ぜん

法は電と影の如しと知つて菩薩の道を究竟し、

諸の功德の本を具して、受決してまさに作仏すべし

諸法の性は一切空無我なりと通達して

専ら淨佛土を求めて、必ず是の如きの刹を成せん」

人生の夢の如く、幻の如く、響の如く、電の如く、影の

如く、一切空無我で、実にあてにならぬ、たよりにならぬ、力にならぬ有様であります。これを如来はご覽なされて憐みましまして、かかる人生の中に迷ひ苦しめる私共を救わんがために、この夢の世にあらわれて、何処々々までも助けねばおかぬとの大慈大悲の光明をもてあらわれましましたる広大の御真実であります。人生は如何ともしかたのないもので、今現に私は子として親をたすけることも出来ず、親として子をたすけることも出来ない、このあてにならぬ、しょうのない人生、生老病死に迷ひ苦しみ悲しめるのを佛かねてご覽下されて、何処々々々でも見捨てぬぞとの広大のご真実なのであります。

「汝、一心正念にして直ちに來れ、我れ能く汝を護らん」との大きなお喚び声、ご真実を聞いて、この思召を頂いて見れば、今日まで自分の思わくから、こうしたいとか、ああしたいかと思つていたのはそもそも誤りであったので、善いも悪いも、いかようになろうとも、すべて如来の広大なる思召にしたがいまかせ奉りて、ただ仏と仏とのみのしろしめすご真実を喜びただかせてもらうより外はない。ここに安心の出來たのが信心のいただけた処なのであります。

安養淨土の莊嚴は

唯仏与佛の知見なり

究竟せること虚空にして広大にして辺際なし  
如来の淨土の有様はただ佛と佛とのみの知らしめす広大なる境界であつて、凡夫善惡の心にては如何とも測り知る事は出来ない。ただとかくの凡夫のはからいを打ち捨てて如来のご真実に従いまかし奉るほかはないのであります。

歎異抄二章にも

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに淨土に生るるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてても存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄へおちたりとも、さらに後悔すべからず候。その故は、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄へもおちて候わばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候わめ。いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」

人生は暗黒である。生も死も、地獄も極楽も、何もかも自分としては、見とおすことは出来ない。ああしたい、こうしたいと自分のはからいを立ててやってみても、どうしても思うようにならない。このどうすることも出来ないものを、何処々々々でもお見捨てなき如来のご真実がありが

たいのであるから、自分としては総してもって存知しないのだが

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

とのよき人の仰せをこうむりて信ずるほかには別の子細はないのであります。何等の善根功德をも積むことの出来ないこの身であつてみれば、とても地獄は一定すみかの身の上、たとい念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔することは何もない、善いも悪いも、すべて如来にまかせまいらせて、如来のご真実で安心させて頂くのであります。

私の母はさらにつけ加えて申しますに「これは私一人がそうであるばかりではない、誰れも彼れも同じことであるから、これを知らねばならぬ」と。いかにも無常転変きままりなきこの人生においては、誰れも彼れも、佛の「何処々々までも見すてぬぞ」との御真実一つで救われるのであります。人間の力のつきはてていかんともべからざる処をあわれみ給う広大のご真実であります。

歎異抄九章に仰せられたように

「念仏を申しても踊躍歡喜の心も一向に起らないが、この喜ぶべきことを喜ばぬのにて、いよいよ往生は一定と思はなければならぬ。喜ぶべき心をおさえて喜ばせないのは煩惱の所為である。然るに仏はかねてこれをご覧下されて、煩惱具足の凡夫であるから、喜ばぬのも無理はな

いてみれば、私共の我慢、妄執、註文、思わく、すべてを打ちすてて、如来の大願海に浮かばせて頂き、喜ばせてもらう外はないのであります。

私の母も、もはや回復の余地がないというわけでもありませんけれども、信仰の問題としていつでも余地はないのであります。如来の方から云えば、現在、只今が余地のない有様でありますから、これを憐みましまして、即今、即刻「一心正念にして直ちに来れ」とよびかけ給うのであります。

弥陀成仏のこのかたは <sup>切</sup> いまに十却をへたまえり

法身の光輪きわもなく 世の盲冥をてらすなり

十劫このかたの如来のご苦勞であります。三世十方の諸仏も、三国の七高僧も、皆このやるせないご真実をきかせようとのご苦勞に外ならぬ。

この広大なる御真実をきかせてもらえば、これをきく一念に「ちからなくして終る時に、かの土へはまいるべきなり」と、お慈悲をききひらいた一念が、いのちの終った時であります。即得往生とは、この広大のお慈悲を頂いた時で、これが一念である。私共は如来の恵みの深いことを仰ぎ、喜んで安心させて頂くので、幸にいのちのちのびて、なおお慈悲を喜ばせて貰うことが出来れば、まことにありがたく、またこのいのちが終つても、安養のお浄土に生れさせ

いと仰せられることであるから、他力の悲願は、かかる浅間しき私共のためであることを知らせて頂いて、いよいよたのもしく有難く思われるのであります。

又何か病氣にでもかかってみると、死にはしないかしらと心細く思われるのも、同じく煩惱のなしわざである。久遠劫の昔から今まで流転し来たつた苦惱のこの娑婆はすてがたいもので、いまだ生れない安養の浄土のこいしく思われたいのは、まことによくよく煩惱が盛んであるからであります。名残り惜しくは思うけれども、娑婆の縁がつきて、力なくして命終る時にはお浄土まいりさせていたただくので、急ぎまいりたい心のない私共のようなものを、特にあわれみましますとは広大の御真実であります」

人生の愛別離苦のたえぬところ、これをご覧下されて、一切衆生をことごとく恵まんとて微妙嚴淨のお浄土を建立し、超世の本願を建てましまして「我れ能く汝を護らん」との大慈大悲の御よび声であります。

今日、私の母の病氣にあたるにつけても、皆様のおこころの中にも色々切なる心配のあることを御察しするのであります。人間の力の及ばぬことは誰れも同じであります。病氣というような境界でない人も、丈夫であるというていても、誰れにても、この如来のやるせないご真実を聞

て頂くことであるから、これまたまことに有難いことでもあります。どうなろうと、こうなろうと、唯仏与仏の知見で広大のご真実を南無阿彌陀仏と喜ばせて頂くのであります

大正六年十二月一日発行、法蔵三十六号。

### 芭蕉の言葉

造化に随いて四時を友とす。見る処花にあらずということなし、思う所月にあらずということなし……造化に随いて造化に帰れ

松のことは松に習え、竹のことは竹に習えと、師の詞のありしも、私意をはなれよということなり。習えというは物に入りてその微の頭わかれて、情感ずるや句となるところなり。……物、我二つになりて、その情識にいたらず。私意のなす作意なり

○ 古人の跡を求めず、古人の求めたることを求めよ。

○ この道に古人なし

俳諧は三尺の童子にさせよ、初心の句こそたのもしけれ

# 人生問題と信仰

福 島 政 雄

## 一、苦 惱

この度『人生問題と信仰』という題で、佛教の信仰上、私が平素感じて居る節々を申述べます。実はこの題は私にとって三十余年前の思い出の深い題であります。丁度の私の二十六歳の夏に、近角常観先生からこの題で一週間ほどお話を承りました。その時近角先生は、教行信証の信の巻の阿闍世王の入信の文、即ち涅槃経より引かれてある阿闍世王の物語を根本としてお話がありました。只今その時のことを思い出しながら、同じ問題を私の味の上から申述べてみたいと思います。

この阿闍世王の入信の文の一番初めに、私どもに非常に有難い親鸞聖人のお言葉があります。

「誠に知んぬ、悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し名利の大山に迷惑して、定聚の教に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快(たのし)まず、恥ずべし、傷(いた)むべし」

この言葉は三十余年前から私の心に深く染みこんで居る

二人と思うべし、二人居て喜ばば三人と思うべし、その一人は親鸞なり」このお言葉は、感傷的というか、浪漫的というか、何となくそういう心持が現れたものであります。しかし、この御臨末の御書は聖人御自身に書かれたものでなくて、聖人の御臨末を追憶した人の心持を述べたものであると思われます。即ち後人の追慕の文であつて聖人が直接筆をとつて書かれたものではないのであります。聖人がおかくれの後、それを心から悲しんで、その流れを汲む人として、自分の心持で、自分には聖人が常住に共に居て下さる、と書かれたものであります。実際そのように解釈されるとき、この書が生きて来る。聖人が直接お書きになつたのでなく、聖人を追憶する涙の中から書かれたというところに、このお言葉が私に活きたものとなるのであります。結局、聖人が直接筆を執つて書かれたものの中には、感傷的なものは一つもないと断言出来るのであります。そして段々と「悲しき哉、愚禿鸞」のお言葉を味いますと、私は、これは聖人が御自身のありのままのおすがたを、久遠の御佛の前に打出された有様である、ということが分るようになりましました。

自分は歎々たる悲しみに沈んで居る、そして悲痛の涙を絞つて居るというのではなく、自分は大きな御光に照らされて、その前に生々と現れてきた自分の姿が見える。自

ものであります。又三十余年の間、私の心に、色々に味われて来たのであります。

元来、私は非常に感傷的な人間でありまして、すぐ物に感じやすく涙もろい性であるために、初めはこの聖人のお言葉を、私の感傷的な気持に合わせる心で味って居りました。そのうちにこの聖人のお心持、即ち魂の動きがだんだん深く分つてくるようになりました。その後ある人から、聖人のお言葉の中には感傷的な文句は一つもない、聖人ほど感傷的な世界を離れた人は少ない、日蓮上人などがかえつて感傷的であった、聖人にちつともそんなことはない、と云うことを聞かされました。それからひるがえつてこれを読むと、なるほどこれは私自身の感傷的な心を、そのまま聖人にうつして、自分の相を見て居たということに気がつきましました。

もっとも、聖人の書かれたと言われるものの中にも、感傷的のようなものが無いでもないのであります。例えば御臨末の御書というのが問題であります。「一人居て喜ばば

分の醜さに気がついては、逃げよう、かくそうとするが、その時、自分のその相を徹見して、佛は、汝がいくら包み隠しても自分にはよく分つて居る、のみならず、お前のその醜い相を自分が此処から見て、そんなことではいけないとも言うのでなく、又、そんな醜い相でよいと言つて居るのでもない、そういう醜い相こそ汝の如実相である、それをどこどこまでも悲感して居るのである。汝のその醜いものの底の底までわがいのちをもって打込んで、汝のいのちをわがいのちとし、わがいのちは汝のいのちと共に、汝が苦しめば共に苦しみ、共に悩み、共に悲しみ、汝一人について、どこどこまでも汝のいのちを融し尽すまでは、汝と行動を共にするのである、というこの広大な佛の「まこと」が胸にひびいて、それ程までに広大な佛のまことの前に、聖人が御自身のいのちのありのままの相を投げ出してことごとく恐れ入つて、自分の醜さを逃避せず、自分の醜さをありのままに静かに視るところの眼を、佛によって廻向された聖人のお言葉が、この悲歎述懐となつたのであります。こういう風にだんだん味うて来たのであります。

一体私自身のことを考えてみますと、二十余年前に非常に自分の悲痛な境遇を考えたことがありました。唯、空に考えるというのではなく、其頃最初に子供を失い、その後半年ほどして妹や母が相次いで世を去り、悲痛のどん底に

落ち、世の中が真暗になって過した時期がありました。その時の自分を今振り返ってみると、自分が初めて人生の悲痛事にあつて自分が感ずる悲痛の心持を振り廻し、人に会つてはその悲しみをもって誰かに同情を求めようとする。つまり自分の悲痛を売物にして、誰からか人間の同情を求めようとして居りました。ところがそういうことをしてみても、自分のこの悲痛な心持を本当に理解してくれるものはこの世に一人もないのであります。

親を失い子に別れた人は世間にくらもあるが、人間の一人一人の境遇や事情が違うので、決して同じ心持は得られない。自分が如何に人生の無常を悲しみ、親を失い子の死に遇つても、本当に同情し共鳴してくれる人は世の中になのである。こういうことがいくらか分つて参りますと、今度は人生に対して、自分の一種の僻んだ態度があらわれてくる。

そうなるも今度は反対に、多勢の中で親を亡くした話をしても、わざと笑いながら話す。つまり、どうせ世間の人々は自分のこの悲痛な心持を分つてくれるものではないからと、わざと笑いながら話すという、一種のねじけた心がずつと続いて、決して素直に自分の心を出さない。そんな心持はどちらにしても正しい心持ではないのであります。しきりに人に訴えるのも、又不自然に笑いながら話すこと

私が母を失い、後に父を失つて、西洋に行きました。その西洋に二年間生活しているうちに、ドイツの家庭の若い娘達と知り合いになり、そんな人に親しみ、これによって自分が親を亡くした悲しみをごまかそうと云う態度に出たのであります。しかしそんな事によってごまかしおうせるかというに、決してごまかしおうせるものではない。自分の生活は益々淋しいドン底に沈んでしまふばかりである。丁度酒に酔つたようなものである。一旦酒に酔つても、すぐ醒めるとなお淋しくなり、結局、煩惱をもって煩惱をごまかそうとしたことがかえつて自分の生活を墮落のどん底生活までおとしたのであります。

私は西洋から帰つて来ましてから、こんなことを痛切に感じました。「自分は浦島太郎のような者である」と。浦島太郎は自分の親に背を向けて龍宮へ行った。そして乙姫を相手に酔つた歓楽の生活を続けて居た。そのうちに浦島の前に一つの幻があらわれる。年老いて瘦せ衰えた両親の姿が現われて見える。浦島はハツとして「自分は龍宮へ来て乙姫様相手に楽しむの生活をしているが、これはごまかしの生活、迷いの生活であつた。」と気がついて、乙姫様が止めるのを振切つて龍宮から帰つてくる。帰国してみれば何百年かの歳月が過ぎ去つて、自分の両親はもはや居ない私は西洋から帰つて、実際そういう感じを痛切に感じ

も極めて不徹底な心境であります。

そこで、つまり私というものは、自分の心持を悲痛な心をもってしきりに人にうつつたえるか、又は、笑いのなかにごまかして人に話すかで、私どもは人間に対する場合、そのどちらかをとるのである、然しこれは何れにしても自然な素直な態度ではない、どちらかに偏した心のあらわし方をするものであります。そういう風になれば、結局どちらの態度に出たにしても、人間が自分の悲しみを持って人に對した場合、曲つた心、僻んだ心が自分の中にあつて居るのであります。そしてこの僻んだ心というもの、自分の境遇が悪くなれば悪くなるほど、層一層ひがんでくるのであると感じてきました。

この僻んでゆく心は何処で解決されるか、というと、何物もたよりにならない、私はどこまでも解決はつかなくしたのであります。そこでこんな態度になつたこともありまふ。こんな人生に対して自分は素直になれない、けれども自分の煩惱はどこまでも強盛に続いて行く。そういう時、一つの道として、自分の煩惱を制するに煩惱をもってするという態度になることでした。例えば親を失つたことを悲しんで、この悲痛な思いを人に打明けても駄目だから、結局自分の煩惱生活をもってこれを誤聞かそうという心持になつた。

た。「この世の中に両親は居ない。自分は浦島の生活を続けて居つた」と思いました。

つまり、煩惱をもって煩惱をごまかそうとしても結局は駄目である。ごまかし得たと思つた後には一層悲痛な淋しさが現れるばかりであります。そうなるも私の心を持って行く所がなくなつてしまふ。

一体私どもがそうなつてくるかどうか、私共には家庭がある妻がある子がある。それで家庭や妻や子で慰安を求むべきだと申されるでしょうが、それは普通の場合に常識の上ではそういうことも出来ませうけれども、いよいよ人生に行詰ると、家庭というものも如何なる場合でも慰めになるものではない。実際人生問題を痛切に感ずると、家庭生活が自分の本當の慰めにならないのである。

その結果、外に向つて迷いあるくというようなことにもなるのであります。併し私共男性の立場から申せば、妻以外の女に迷つて居ることは、妻にも迷つて居ることである。妻以外の女には迷うが妻には迷わないと云うかも知れませんが、そうではない。妻以外の女に迷う心は自分の妻にも迷う心である。妻に対して迷う限り家庭生活がおさまる道理はありません。要するに外に迷い内に迷う。その生活を続けて居るのである。そうすると、私にとつては、火は外にばかり燃えているのではなく、家庭の中にも燃えて居る

のである。外を見ても火が燃え、内を見ても火が燃えさかっているということが自分の現実相であったことが解ったのでありました。

## 二、無自覺

自分は美しい言葉を使いながら煩惱をごまかし、一つの迷いで他の迷いを糊塗しているに外ならないのである。問題は、自分は外に向っても迷い、内に向っても迷っているということになるのであるから、斯様な問題は人間の関係においては解決の出来るものではないのであります。

そこで、私共人間世界において、迷いから迷いを続けている時、それだからこそ、一足飛びに佛の世界に安住するのだというけれども、そんなに手っ取り早く片付くものではない。私のような者は、迷えばドン底まで迷って行く。いい加減で反省することはない。底の底まで行って行詰れば、自分の生活は何方に向いても根柢のない生活である。何方へ行っても救われないのであります。自分は地獄より外へ落ちる所はない、全く絶望であると押詰って来るのである。私自身は実際そうなのであります。

これについて、ドイツに居る時何度も繰返して見たワグナーの歌劇の筋が、私の問題に触れるのであります。西洋の中世紀のことであるが、タンホイゼルという騎士

が故郷を離れて永年耽溺した生活をした揚句、始めて自分の罪惡に目醒めて苦しむ、その罪惡をどうすべきかと云うことが問題となり、悩みの末にはるばるローマ法王の許に巡礼することになる。法王の許でその一切を物語って許しを乞うのである。その時法王は、手に持った枯木を地面に立てて「この枯木を見よ、これは再び芽を出すことはない。汝のような耽溺生活をして来た者は未來永劫救いの道はない。汝は地獄へ落ちて行くより外はない」と。そしてその最後は聖き女性エリザベートが、命を投げ出し死を以てタンホイゼルが地獄の底に落ちるのを救うたとなっている。

これは西洋のオペラとして面白いもので、普通の西洋人の考と違っている。普通の考では、タンホイゼルが聖き女性エリザベートの所に帰って来ると、エリザベートは悦んでこれを迎えて、幸福な生活が始まるという風になっている。然るにエリザベートもタンホイゼルも二人共死んで、死後の魂の世界でタンホイゼルの地獄に落ちようとするのを救うというのである。

私はこのオペラを三度も見て、実に感激したのであります。そういう所にも、自分の問題があると思ひました。

このオペラの終末は全く仏教的で、仏教でないといわれない思想だと思ひました。何方を向いても迷い迷って行き

は五逆罪、三つには一闍提なり。この如き三病、世の中に極重なり、悉く声聞、縁覺、菩薩の能く治する所に非ず。」

以上、涅槃經の中から、世の中に三種の病があるそれは一には謗大乘一正しき道をそしる、その道に徹底せる人をそしる者。二には五逆罪二父母を殺す、阿羅漢を殺す、和合僧を破る、佛身より血を流す、などの五逆の罪を犯す者三には一闍提三断善根、信不具足。この闍提というのが問題であります。これに続いて、阿闍世王の物語りがあります。この王は第二の五逆罪を犯した人である。これについて私どもが考えねばならぬことは、五逆罪を犯すほどの人は、ひるがえって来ること亦鮮かである。悪にも強ければ善にも強いのであると云うことであります。王は父を獄死せしめ母を深宮に押しこめた程の逆惡なことを行つたが、ひるがえる時には非常に鮮かにひるがえって居ります。

その次の一闍提というのは、一口に言えは何としても手のつけようのない人である、例えば屍のような者である。如何なる名医でも屍は治すことは出来ない。一闍提とはつまり求道心の微塵もない、全く無自覺の、何とも手のつけようのない、屍のようなもので、声聞や菩薩もこれには手のつけようのない。諸の人には佛性があるといふけれど、この一闍提には佛性が微塵もない。求道心は微塵もない根

終局地獄へ向って落ちて行く外はない、どうかしてどうかして落ちて行く。この人生で一切の救いは絶え果てる。然しこの時自分がいい加減にお念佛を申す。そして、そのお念仏の中に救われるということでは真実の救いにはならない。実際自分ほどちらを向いても終局地獄へ真倒さまに落ちるより外に道はないのである。

聖人の御悲歎の言葉が、私の身にもよく味われるのであります。私というものをもう一步進んで申しますれば、実は地獄必定の自覺さえもない地獄必定の自分である。私の心は案外ケロリとして平氣なところがある、飽くまで煩惱によって煩惱をごまかして居る。たまたま問題が起きて、私が平素親しくして居る人々から見捨てられはしまいかというようなき、今更のように自分は恐ろしい奴だと感ずるが、喉元すぎれば熱さ忘ると云う風で、あぶないことが通り過ぎると元の平氣な氣持にかえる。自分は、何処かで、自分ながら恐ろしい奴だと思ふ時には、いかにも地獄必定と感じている様であるが、又その機会がすぎると平氣になっていく。これが私の相で、地獄必定などと思えないつまり、無自覺のまま三界を迷うてゆくのが私である。

聖人は更に進んでこう仰せられてあります。

「夫れ佛難治の機を説いて『涅槃經』に言わく。迦葉、世に三人有り、その病治し難し、一には謗大乘、二つに

本的に無自覚であつて、どんな菩薩でも如何ともなし得ない代物である。この一闍提こそ何よりも一番問題である。

これは他人の問題でなく、私の問題であります。この物語りを見ましても、王は五逆罪を犯したが廻心が非常に鮮かであつた。さて自分はどうか、三つの中のどれかとなる、そう言われたくないし思いたくはないが、結局自分は一闍提であるということに落着くのである。こう云い乍ら自分はまさか屍ではないという心が動く、一闍提の自覚は分らないのであります。

自分は屍ではない一闍提ではないと思ひ、五逆罪に落ちても屍ではないと云いたくても、結局、当らないと思ひ、いることが当って居るのである。いよいよ死ぬる病人は自分死ぬると思ひ居らない、よくなることのみ思ひ死の自覚がない。人間はこのように自分の如実の相がわかないのであります。

自分は悪いには悪いが、さすがにあれほどではないといふのが私の根性である。しかし、あれほどではないと思ひてはいるが、実は急所に當つて居る。急所に當つて居るのに逃げようと思ひ、私共は五逆罪ではあるかも知れないが一闍提ではあるまいと。丁度病人が明日はよくなる、だうと思ひつつ死んで行くように、自分は一闍提ではないと思ひながら、結局するすると一闍提に墮ちてゆくのであり

終局、私は苦しみに遇えば苦しむ、悲しみに遇えば悲しむ。大丈夫の心のもりでいても何かの問題でぐらぐらとする心の引続き、その無常の姿こそ私の自性である。磐石の如く動かない堅固な心は私の中には微塵もない。私は徹頭徹尾ぐらぐらの心の上に立つもので、息を引きとるまで無自覚から無自覚をたどり行くものであります。そして時々人間煩惱の毒酒に酔うのであります。そんな時には、いよいよ苦しみの底に至つて初めてお念仏の世界に触れるのであると申して、そう思ひ居りますが、それはお念仏といふものを持つて来て、自分で自分の毒酒を製造しているのであります。

私の人生における如実の歩みはこんな所に慰安があるのではない。何等の修飾のない、何等の幻をも描かない人生の歩みというものは、その無自覚な一歩一歩、その歩みのうちに何かに打突かつてはハッと目が醒める気がする。そして又無自覚に眠る。又ハッと気がつく、又こんなこと眠つて行く。つまり自分の相というものに目が醒めず、眠りから眠りに移つてゆくというのが掛け値のない私の相であり、歩みである。

そこを聖人は明快に言われる。親鸞は欺様々々の自覚に入つて意義ある生活をしてると仰せられてない。どこどこまでも自分は無意義の生活を続けている、実に恥すべき

ます。自分の相が分らないところからそうなるのであります。終局私は一生無自覚のままに過ぎて行くことになります。もし自分は無自覚ではないと思ふときは、自分をごまかしている、或一時の殊勝らしい自分の気持をとらえているにすぎないのであります。

然し私は自分は無自覚でなかつたこともありましたが三十余年前、二十六歳の時、七月十一日に近角先生のお話をきき、清々しい気持になつて法悦状態とはこんなものであるかと思つたことがあつた。夏のことで今の明治神宮の裏手の方には囀がしきりに鳴いて居る。その声を聞いてカリヨウビンがを連想したり、如何にも自分は一かどの信仰に入つたと思つて居た。然し、自分はある一時の氣分に酔つていたにすぎませんでした。

それから十余年の間、人生問題に對して、私の心にさういふ心持が往來して、自分は確かに廻心したと思つて居た。次々に起つて来る人生問題に對して苦しむ時は、自分はある時は廻心したつもりであつたが、實際問題ではなぜこんなに悩まされるのだらうと思つて居た。それはつまり悩むか苦しむかしても「自分に信仰がある」と思へば苦しみはなくなると思つた。その過去の法悦状態を偶像化したある時はその法悦の境地を本当と思つて居た。それが非常におかしな事であつたと後になつて氣づいてきました。

であると、そしてこの三種の難治の機をあげて居られる。

自覚ということが出来ない、一闍提が自分の境地であるといふことに落着くのである、そうなりたくないが、終局そこに落ちつく。闍提になりたくないがそこに落ちる。

聖人が阿闍世王の物語をお引きになつて居られる中に、このお言葉にふくまれてある御心持が限りなく私に響いてくるのであります。人生の行路で色々な問題に打突かつては私は一闍提の自覚もないといふことを感じて来るのであります。私は無限に浅薄であることを次から次へと見せつけられてゆくばかりであります。そこに、私の中に阿闍世王の物語が巻きかえし／＼展開されてくるのであります。

人間が自分の姿というものに眼がさめる。自分の値打がわかるということは非常に重大なことであると数年来考えております。私は自分はカメレオンのようなものであると思ふのであります。この動物は緑の草原では緑色になり、樺色のところでは樺色に変じ、本来の色はどこにあるか分らない。私はそれを自分に感じます。自分は修養というところに破れて初めて絶対の信仰に目覚めさせられたのであるけれど、絶対他力の信仰も近角先生のお話では是も限りない底があるもので、落ちて行く、もっと掘ればそこに泉がある。そこに腰を落ちつける。いやこれはまだ底ではない。又掘る、するとそこに清泉が出る。破れてまた往く。

一つ往けば又一つ。こうして無限に行くのが信仰の問題である。と近角先生は仰言りました。

これを自分の上に考えて見ると、昨日は今日と嘘から嘘である、まこととすることが嘘になる、こうしてゆくうちには魂が決定してくるのではあるまいかと妄想して居たこともありません。私の西洋での二ケ年間の生活を投出してみれば、すべてこれは妄想であった。周囲の環境や居り場居り場であつて居たそれがちがひ、西洋が灰色なら又灰色になつて居る自分を発見して、自分の魂の現実を悉く裏切られる。自分の浮草のような生命が、次から次へと裏切られていく。自分は縁次第でどんな間違ひでもなしかねないということがよく判る、どこまでも頼りないものであることがはつきりする。

しかし、只一つ、どこどこまでも頼りない無自覚の歩みフラフラとして根柢のない私のいのちの上に、一つになつて共に歩みを進めるもの、私の無自覚の途上、私のいのちの中心に飛びこんで私にどこどこまでも涙を注いで私と共に歩いて下さる生きた力、実際の人生問題にぶつかかる毎に、この大いなるまことのいのちの力を感ぜしめられる忘れ続ける私に、私を目醒めさせようとし、私と共に苦しみ給ひ、迷えば共に迷ひ、常に私に入り来つて私のいのち

と共に付き給う力、私の上に種々の御縁を通じて活きた力として付き、私を背負つて生きて下さる。この大きな仏の力が私のいのちに入り満ちていて下さることを感ずるのであります。(未完)

### 夢

足利浄円師

ねむるとき夢みるものとおもうまじ さめたるときも  
ゆめのまたゆめ

この夢は無始このかたの夢ときく いつきむべきも  
はてしなき夢

あな寂し夢とはきけどあまりにも ふかきねむりにさ  
めようもなし

覚者あり声をからして喚びたまふ そのこゑかすかわ  
がむねをうつ

さめやらぬ夢のうちにもてをあはせ 覚者の声をたよ  
りにそおもふ

## 福島先生にお別れして

福島政雄先生が二月三日午後三時四十五分、八十六歳で御老衰のためお亡くなりになられました。昨年初秋頃から段々お弱りのお様子、正月には流動食ばかりとの奥様からのおたよりを頂きながらも、それでも春の陽気になれば再び御恢復をと祈念申しておりましたが、とうとうお別れとなりました。

会者定離かねてありとは知りながら昨日今日とは

思はざりきに

の祖師のお歌を誦しながらお念仏申しております。

私は京都の学生時代から先生のこととは知人からよく聞かされていましたが、直接お導きをうけはじめましたのは終戦後、昭和二十五年からであります。四半世紀、二十五年にわたつて、広い御理解をもつて私共を護念して下さいました。

今日先生の御靈前に坐して、折にふれ、時にふれておも

## 花田正夫

らし下さった御信味を思いおこしておりますが、愛別の悲しみに曇らされてまともりかねますので、先生の御略歴と御著書、そして先生の日誌抄とも申すべき歌集、「心光」と「心光のあと」から大正七年から昭和三十三年にいたる間のお歌をひろつて、先生をおしのび申すすがといたします、もうしばらく日月をへて私自身が蒙りました慈訓を誌させて頂きます。

先生は明治二十二年(一八八六)熊本市に御誕生、明治四十五年東大哲学科卒業、以後、文部省を経られて、旧制第二高等学校、旧制広島高等師範学校、広島文理科大学、昭和十六年建国大学教授、次いで大谷大学、日本大学、神戸大学、都留文化大学、最後は北里大学で教授となられました。

昭和八年にペスタロッチ研究によって文学博士の学位を得られ、生涯を内心に深く佛法を貯えられて、教育学とそ



の道を先生独特な立場から明らかにせられました。  
御著書の重なるものに、教育の理想と生命、教育より見たる女性と母性、ギリシヤ教育史、ベスタロッチの根本思想研究、日本教育源流考、教育の根本原理、教育生命の原理、西洋教育小史、読書と教養、日本家庭史と教育、等の教育関係書と更に歎異抄身読記、四十八願講話、浄土の莊嚴、親鸞聖人を仰いで、ひらけゆく心、聖徳太子讃仰、等々宗教関係のものも多数あります。

○

歌集『心光』抄

大正八年

まぼろしの世ぞとをしへてみ佛の刹にかへりぬあはれわが子は

八月三日和子俄に世を去りぬ

子をおもふ心の闇の底までもてらすほとけの道ぞうれしき

大正九年

かどに待つ母はいまさでふる里もいまは淋しくなりはてにけり

憂きにつけ樂しきにつけ母上のまさばまさばとおもひな

ほのぐらき御厨子の奥に摂政の敵のみすがた仰ぎてぬかづく

国家の生命御肩に負ひて立ちましたしいつのみすがた仰げばたふとき

歌集「心光のあと」抄

昭和十八年

大陸に荒びしいのちそのままに我が師の御前に披きまつりぬ

中秋に白杵祖山先生を訪ふ

あなたふとすさびしわれをそのままに撰取しませり我が師の君は

昭和二十二年

ひとつひとつ身をきるごときおもひして集めし書籍を売物にする

昭和二十四年

教への門みなとぎされて人の世を辿り行くかもわれひとりして

四月八日の朝、教職追放うく

斯の道や行く人なしと言ひにけむ古へ人の魂ひびくかも

昭和二十五年

聖の道つらぬきませし親鸞の自然法爾のみこころおもふ

くかな

述懐

くだけたる二つの魂の触れて棲む一つの家庭ぞみほとけの領土

久遠劫のなやみの生命しみとほすわがみほとけのみ誓のなみだ

大正十二年

同じ世におなじ佛の胸に生くる久遠の友を恋ひてさすらふ

しみじみと佛の御名のかよひ来てすさびし胸のなごみわたれる

過ぎし日も今日も来む日も煩惱の無窮流転のこの身なりけり

昭和十年

計らひなくただ一筋に人の世を生きとほしけむ御聖しぬぶも

歎異抄を読む

法隆寺

朝しらむ聖靈院や磬の音に御誦経の声の澄みてきこゆる

大経の法縁の感懐

昭和二十六年

まことなき身をかえりみず世に立ちてまことありげなる此の身淋しき

さもあらばあれ暮れ行く年も永劫の御仏のまこと身に受くるわれは

昭和二十八年

うらぶれの年は暮れ行けどまことの道ひたすらに進むるや止まず

斯の道やわが進む道日の本の国の力となりぬべき道

昭和二十九年

三界に家無き身なり御仏をたのみまつりて住みうつり行く

十月二十四日転居

昭和三十一年

人の世のさがしき道は老の身をむち打ちて歩む一日ひとひよ

御仏のとはのひかりのなかりせばさがしき道にたふれ伏さましを

昭和三十二年

世界の民和らぎ照らす釈迦牟尼の三千年の法のともしび  
いつしかも三年経にけりいたづきの吾子をかなしみ目を  
かぞえつつ

七十路の齡経ぬれど矩を踏えずと孔子のたまふ心境は遠  
し

かへりみる五十余年のたましひの辿りのあとに心光照ら  
すも

ひたすらに吾子が行末いゝる父のころもとほれ今日の  
嘉き日に

太子奉讃

二男の病をその誕生日に

悲しみのことある毎に国民は聖徳王を恋ひ仰ぎけり

虚仮の世に佛のまこと身にしめて聖徳王は生きたまひけ  
り

とこしへに國のいのちと仰ぎまつる聖徳王の御をしへた  
ふとき

吾が娘逝きて八とせは過ぎぬ人の世のかなしみ深く胸に

## 一 道 会 の 記

続いて向島諦宜先生のお話は次のようでありました。

御指名によりお話させて頂きます。今も花田先生がお話  
下さった松本先生に毎年この会でお会いし、お話を聴聞し  
たのです。が突然お亡くなりになり、お姿を見ることが出  
来なくなり、悲しいことになりました。花田先生から詳細  
にお話がありました。松本先生は胸には強い情熱を秘め  
て居られますが、外見は非常に温厚な方で、所謂目立たな  
い方でありました。私自身も御生前はこれといった感じは  
もっていませんが、今になって考えさせられて見ますと大  
きな存在だったと思うのです。

私も先生がまだ鷲岳という姓だった学生の時に一緒に知  
四明寮で生活して居ったのです。もし松本先生が居られな  
かったら、さきほどのお話のように花田先生と松本先生の  
縁もなかった。本当のお念仏を知四明寮に伝えられたのが  
松本先生でした。引いては池山先生との御縁も生れなかつ  
たということを此頃つくづく思います。松本先生は我々の

しみ入る

述 懐

親のをしへ妻のいさめもかへりみず沈み行く身をつくつ  
くとかおもふ

富 士

初冬の光雪にかがやき大富士はいま雲上にそびえて立て  
り

薄雲は富士のふもとに迷へどもいただきは清く空にそび  
ゆる

朝あけの空横雲なびき富士のねの雪のいただきほのかに  
赤し

歳 末

あつき恵み身にあつまりて年の瀬をわたり行くかも七十  
路の此の身

(追記) 昭和十六年から三十三年までの十八年間は、  
日本国も福島先生のお家庭も悲痛な事が充ちていまし  
た。その茨の道を、佛のいきたおまこと一つを仰がれて  
人生手放しのお生活が綴られ、そこに佛の御傍きにふれ  
襟を正さしめられます (花田記)

## (二)

### 榊 原 徳 草

念仏生活に重大な関係を持った方だったので。今までは  
先生の御恩ということとは反省もしなかったのですが、非常  
に御恩になっていながら、御生前に報恩の少しでもなし得  
なかったのを慚愧にたえません。

実は私も寺の生れで一ヶ寺の住職をしているのですが、  
子供の時から念仏の中に育てられながら本當の念仏という  
ことを知らずに大学まで卒えました。こちらから求めたの  
でないのに松本先生が寮に居られた因縁で念仏を聞かせて  
頂くようになりました。それは松本先生や花田先生のお努  
力で京都学生親鸞会が結成され、山内会館で信仰の告白会  
があるというので寮生十数人の皆様に誘われて、別に何と  
いうこともなしに行きました。そこで花田先生のお話を聞  
きました。声涙共に下る熱烈なお話で、私はその姿を見て  
いるうちに、これは何か菩薩がそこに獅子吠して居られる  
ような感じを受け、知らぬ間に私は高声念仏しているのに  
不図気付きました。それまでそんな高声念仏をしたことは  
無かったのです。

会が終つて、花田先生と一緒に寮に帰ったとき、何か納得のいかぬ所はありませんかとおたずねでしたが、有難うございますと申すばかりでした。これが護信であつたのかどうかは判りませんが、それからは横田先生のお話を聞き、池山先生の御縁を恵まれて、ことに池山先生のお宅には何度もお邪魔させて頂き、そういう不思議な御縁で今日まで来たわけでありませう。

このように我々の信仰に重大な役目をして下さった松本先生であります。その御恩を感謝する次第であります。私自身もう喜寿になりましたのでお恥しい次第ですが、先頃西元さんや皆様は祝宴を張って頂いたんですが、この年になつてただ碌々と生きています。この頃切実に死というところを感じるようになって参りました。仏教は、若い人も集つてくるのに、死ということをお説くのはどうか、もつと仏教を現代風に説くこともあると云います。然し仏教は生死の問題を離れて無いわけで、生死出づべき道、解脱ということが仏教、特に親鸞聖人の教の中心ではないかと此頃考えるのであります。生老病死、特に老死というところがなかつたら本當の宗教というものは要らんのかないか、生れたものはやがて死んでゆく、いつまでも生きたいのは本能でしょうが、それは叶いません、どこかで打ち切られる。その解決は宗教の外には出来ません。

で、死もまた我なり、という我は、これは普通の私ではない、生死を越える我は、我ならぬ我で佛様であります。南無阿彌陀仏であろうと思ひます。南無阿彌陀仏が私になつて下さつて「死もまた我なり」となれるので、私はこのように味うております。

いつかも申しましたが、南無阿彌陀仏というのは私の家で、この肉体は亡んでゆくが、その肉体を包んで南無阿彌陀仏が永遠に死を乗り越えて、死もまた我、そういうふうに思ふのです。

私がこれから死んでゆくと思ひます、何処へ行くのか、又何処へ行きたいのか、これは歎異抄に聖人が「力なくしておわるとき彼の土へはまいらさるべきなり」と、そういうようにしてお浄土へまいらせて頂けるのだと聞かされていますが、私が死ぬ間際に行きたい所は、すでに亡くなつた私の父母のいる処へ行きたい、父母が私にとっては具体的な佛様だと思ひます。父は私の十九才の時に亡くなり、もう五十回忌も経っています。私が三高在学中の二年生の時の二月十五日でした、スペイン風邪で亡くなりました。世間的にはこれという人物ではなく、又経済的には常に母を泣かせていました。お念仏だけはよく申しておりました。あとから聞きますと、お念仏の師は利井鮮明師であつたのです。とにかく念仏の絶え間がない父でした。

お釈迦様は小国ではあつても一國の太子で思ふことは何でもできた。人生からいへば最高の幸福な生活であつて、この世では別に求めるべきものは持たれなかつた。それをあえて捨てて出家せられた。それはやはり生死が問題だつたのです。これが出家の最大の動機ではなかつたかと思ひます。伝説にもあるように、生・老・病・死の四門出遊のお話のように、自分もいつかは老と死に行くのでないか、そこに気付かれて愕然とされたとあります。

伝説ではありませんが、そういうことが最大の動機ではなかつたのか。それは私が死んでゆくという問題です、この死という苦からどうして脱れるかということが根本問題であると近頃思ふのであります。

花田先生も同じ病氣を持っておられるようですが、私も十年來、狭心症の氣があり、今でも胸が氣持が悪い、四年間もずつと薬を飲み続けて仕事をしていますが、いつ倒れるか知れぬと近頃特に思ふのです。今年に幸にこの一道会に出席出来ましたが、松本先生は今年は見えないように、私も来年のことは一期一会で期し難いのであります。

皆様もそうなんですが、はっきり自覚しないだけなんです。いつか「慈光」に、花田先生が死にかかわるような重病をなさつて、その時に「死もまた我なり」と死を受けとつて越えられたとあります。これは非常に大きなこと

危篤の電報がきて京都の学校から帰つたのですが、その十日前に父は京都に来て西大谷の御廟にお参りしました。道々話すことがみな遺言なんです。自分が死んでも学校をやめるなどか、私その頃ボートの選手をしていました。あれは身体に悪いからやめよ、などと云いました。今も覚えていますが、昔の京都駅へ父を送りましたが、父は門限に遅れるから帰えれ、という。それでは帰ります、と帰えりかけると、一寸、という。何ですかという、イヤ別に用事はないと。そんなことを二三回繰り返しました。何となく別れたくない氣持があつたのだと思ひます。

その十日後に危篤の報せを受けたのです。帰ると意識はまだあつたようですが、苦しんでいました。私が病床に坐つて居りましたら、虫の息の下で讃仏偈「光顔巍巍、威神無極……」を唱えています。それをじつと聞いていました。ら「病氣が感染するからあちらへゆけ」と言ひます。

私は台所の方へ参りました、そこに世話人など詰めかけていましたが、その中の一人で面白い世話人、有難い人です。さて、御院主さんのご安心をたしかめて来ようと立つて行つて、しばらくして帰つてきて、大丈夫、大往生だ、と云いました。その人の話に「ご院主さんに苦しいでしょう」というと合掌したという、苦しい顔でニコリ笑つたという、「御院主さん笑われた、大丈夫々と云いま

す」

それから間もなく息を引きとりました。父は暗々のうちにお念仏の力、信仰の有難さを植えつけられて来たのでないかと思えます。

母も八十六才で亡くなり、間もなく十七回忌ですが、その年の十月一日に報恩講を勤めるということで、私は帰って準備をしました。母は大分気分が悪かったようですがそれでも庫裡の障子の切り張りをしたりして、すぐまた横になって休んだりしていました。本堂の御莊殿の道具がわからぬので母に申しますと、私が探すと云って本堂に出て来て打敷を出しながら「お父さんは経済は駄目な方だった。御法は喜んだ方だったなあ」と云いました。

夕食になって、丁度その時、老人会から慰安の意味で折詰がとどき、母も頂き私もいただいて楽しく夕食をしました。しばらくすると「アーツ」というえづく声なので、どうしましたかと伺うと返事がなく「アーツ」というばかりなので驚いて母を呼びますが、倒れたまま応答がありません。一緒に数分前に食事をした其の母が、もう命終している。亡くなった母は、また楽だったとも思いますが、私なと残された者達は何となく本意ない気持でした。

私のために、その他の子供のために随分苦労した母、その母も必ずお浄土へまいつている。私の伯父の羽溪の母方

### 念 佛 詩 抄

毎日 毎日

毎日 毎日

地獄行き

遠い地獄は

しらんけど

今の地獄を

なんとしよう

ただ弥陀タノム

ほかはなし

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

ただそれだけを

の伯父の遠山諦観もそうです。念仏をよるこんで先にお浄土へ往っておる。私の死もいつか、そんなに長い時ではないでしょうが、この父母、伯父の居るところへ往きたい、そういう気持です。

私にとっては、そういう人々が生きた仏様です。その他足利浄円師も池山先生も白井先生も、そういう善知識の居られるところへ参らせてもらいたい、又必ずまいらせてもらうのだ、そういうことで何か気が安まるのです。要するに池山先生が臨終のお言葉

「何も残るものはない

何も残るものはない

ただお念仏だけが残って下さる

ただお念仏だけが残って下さる

えらいこったよ、ありがたいこったよ」

と。そのお念仏の中に皆が俱会一処する。その世界に私も参らせていただきたい。何時その日が襲ってくるか判らないが、生死を超えさせていただく、そういう世界にまいるせていただく……。

まことに取りとめもないことですが、これで失礼します

続く

### 木 村 無 相

一文不通の

わたしゆえ

むつかしいこと

わかりやせぬ

墮つる身メアテの

本願と

ただそれだけを

聞くばかり

ナムアミダブツと

聞くばかり

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

名号不思議の海水

読んでも

聴いても

解っても

身についたものは

ナンニもない

わたしはまつたく

一文不通のともがら

一文不通のこのわたしを

そっくりそのまま

いだいてくれ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツと

根よくお聞かせの

ナムアミダブツさまよ

おねんぶつさまよ

〃名号不思議の海水は

逆謗の屍骸もとどまらず

衆悪の万川滯しぬれば

功德のうしおに一味なり〃

ナムアミダブツ

大つなみに

残るものは

天上の月一輪

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

信ずべし

雪がさわさわ降っている

さわさわ雪のその奥に

親鸞聖人あらわれて

〃彌陀の本願信ずべし

本願信する人はみな

撰取不捨の利益にて

無上覺をばさとるなり〃

彌陀の本願信ずべし

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

残るものは

和上仰せに

〃大海嘯に

残るものは

天上の月一輪

仰せが仏法なり

聞いた心が

善法ではない〃

天上の月一輪

ナムアミダブツ

そのまま引受けるが

ナムアミダブツの

仰せ

ナムアミダブツが

佛法さま

聞いた心に

用はない

△再版▽ 信仰体験録

安波勲八著

第一篇 死の宣告を受けて

第二篇 余が入信の径路

第三篇 信仰と真理

第四篇 随感録

追録 臨末法語と弔詞

定価 一、〇〇〇円

発行所 京都市左京区高野泉町四〇 文明堂

振替口座 京都 七七三四

安波先生は東大医学部時代に近角先生のお導きをうけられ、別府で眼科医を開業、別府求道会で麻生、和才の先輩と共に聞法、又東陽和上の門を叩いて求道せられました。

大正十四年、胃ガン、手術不能との宣告を九大医学部でうけ、十五年八月に浄土へ還られました。第一篇に死の宣告を受けられてから臨終までの信境をありのままに記録され、この信に辿りつけた道筋を第二篇に述べてあります。

又信仰と真理は、宗教の誰れにも大切なことを錯覚の上から説かれ第四篇は求道の旅で気づかれた信味を記録せられたものであります。

昭和七年に初版が出、爾來時に応じて版を重ね、今回は御令息方の要望によって新装版が発行されました。

# あとがき

一月には高千穂師の御急逝を誌しました  
が、二月三日には福島先生の御逝去、昭和  
二十五年以来、慈光誌を護念下さいまし  
て、人生各方面にわたり、又経典の全般に  
ついて微妙な信味をお恵み下さいました。  
会者定離はのがれ得ませぬながらも、まこ  
とに身体の手足を失ったような、又心の何  
処かに風穴があいて冷たい風が吹きさらす  
ような、何とも云えぬ淋しさであります。

西元宗助様からお電話を頂き、御葬儀に参  
列下さった由、奥様は永い御看病疲れでど  
うしていただけるかとお案じしたが、緊張も  
していられたので意想外にお元氣だったと  
のことでありました。

謹しんでお別れにのぞみ厚恩を謝し、今  
後も宝林壇上から末ながくお導き下さるこ  
とを称名裡に謝します。

不順な冬も去って、花と若葉の三月がま  
いりました。

あなたとうと青葉若葉の日のひかり

の句を思い併せております。青年学徒に  
は、入学、そして卒業、就職と嬉しい忙し  
さでありましょうが、行手に幸あれと念じ  
つつも、天竜小唄を思わず口ずさまれます

天竜下ればシブキがかかる

カケテヤリタヤ、くく松笠

松笠では片袖ぬれる

持たせやりたやくく蛇の目傘

人生の急流を筏で下る旅路、水しぶきが  
ひつきりなしにかかるにつけ、松傘を、い  
や蛇の目傘をと祈念される久遠の親心がし  
のべれます

福島先生の人生問題と信仰の第一回分を  
掲げさせて頂きました。先生は自分は一圃  
提である、不信の徒、断善根の輩こそ我  
なりと、佛光に照らし出されたままを克明  
にお述べ下さり、このたすかるよすがのな  
い身に蒙るいきた佛のおまこと一つを鮮明  
に掲げて下さっています。どうか私共の心  
の鏡として味読させて頂きましょう。

私自身、愚と思えぬ愚、悪と思えぬ愚、  
迷いと思えぬ迷路をはてしなくさすろうて  
いることを云い当てられて、その心の闇の  
底までしみとおる大悲を仰がせて頂いてお  
ります。

## 〔御案内〕

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜、  
午後一時半。南区駈上町二の八八、  
一道会館。

市バス、新郊通り一丁目下車。地下鉄  
新瑞橋終点下車。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後  
昭和区小椋町二丁目四番地。  
市バス、北山町、又は御器所通り下車。

定価 半年 五〇〇円 (送共)  
一年 一〇〇〇円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八  
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八  
発行所 慈光社

振替口座名古屋 一〇四七〇番  
郵便番号 四五七